

藤並の森

Vol.16

高知県立
文学館

●「山里（大豊町立川）」（写真提供／秀島信恵）

リレー随筆①⑥ 物部川の挽歌 — 田岡先生に捧げる — 船曳 由美

田岡典夫先生が逝かれて、今年ははや二十年となる。高知新聞が元旦にその特集記事を組むとのことで、昨年暮れ御妹さんたちと熱海を訪れた。

「熱海の殿様」といわれた先生の御邸は駅の裏の桃山という丘にあった。急な坂を上っていくと海を見はるかす台地に城のような石垣のみ残っていた。屋敷は跡形無く、マンシヨンが敷地いっぱい建てられている。

かつてこの庭にはナナカマドの太木が二本あった。夏は濃い緑の影を投げ、紅葉も美しい。とりわけ春、澄みきったピンク色が梢を飾り、数日間息をのむほどの華やかさで目をたのしませてくれる、と先生は書かれて、ご自宅を八七釜洞と号された。親友の横山隆一が八笑龍洞と号したのも、これにならったことである。

先生は誰彼へだてなく人々を遇されたから、吉井勇、村松梢風、山本周五郎、広津和郎といった文人がこの七釜洞を訪れている。ある時は井伏鱒二が太宰治、亀井勝一郎と連れ立ってきて、終日、将棋をさした。海音寺潮五郎は「土佐偉人伝」を借りて短篇をものし、舟橋聖一は「武市瑞山関係文書」を持ち帰り「花の生涯」の資料にしたという。

戦争末期、三十八歳の先生にも徴用がきて、別離の挨拶に谷崎潤一郎宅に向かれた。谷崎は「君もか」と無然と言いい、ややあつて、日の丸に無然として和歌をしたためたという。

まさに悲喜憂歡こももの三十余年をこの七釜洞で過ごされたわけだが、私がお目にかかったのは晩年のことである。当時私は平凡社にいて、雑誌「太陽」や単行本に御執筆頂いていた。お会いすると必ず高知の話をされ、たびたびお招きを受けた。

上佐の海は碧かった。棟の木が花をつけ、北の山々を薄紫に染めている風景は、ことのほか美しかった。しかし私は物部川の山田堰を見るや、たちまち兼山のとりこになった。

先生、兼山です。いまの高知があるのは龍馬ではない、野中兼山です、と興奮する私に、先生もまた、そうですね、兼山だけは書かねば死んでも死にきれません、といわれた。

こうして渾身の二千枚の力作「小説野中兼山」(全三冊)は昭和五十四年に刊行、大変好評で、毎日出版文化賞を受賞された。

その頃であったか、いけません、いよいよです、と七釜洞を手放すといわれた。松の手入れだけでも大変である、行きつけのレストランにも借金があるとのこと。考えてみれば高知の田畑は農地解放で没収、赤石町に一千坪あったという田岡御殿も見知らぬ人々に占拠されているという有様。ソロバン勘定がダメで貧乏を知らないから、一文無しになるまで打つ術がないといった方であった。

しかし驚くべきことに、先生は口惜しいとか無念である、といったところはさらさらなかった。その清々しい態度には心から打たれた。

夢茫々と見上げるマンシヨンの端に桜の大樹が一本だけ残されている。四月七日の先生の御命日には花を咲かせてくれるであろうが、いまは裸の大枝に風が鳴るばかり。がその風に重なって水音が聞こえた。いつも私の耳底にひびいている山田堰の瀬音であった。

それは、野中兼山と田岡典夫、高知の山河を愛し、名利にとらわれず、志高く生きぬいたお二人への、物部川がうたい続ける八挽歌であった。

(フリー)編集者

◆次回企画展によせて◆

2002年6月28日(金)～2002年8月4日(日)

「棟方志功展」

アイシテモ、あいしきれない
オドロイテモ、おどろききれない
ヨロコンデモ、よろこびきれない
カナシンデモ、かなしみきれない
それが板画です

棟方 志功

※

世界のムナカタと呼ばれた板画家・棟方志功(1903～1975)は、明治36年、津軽の刃物鍛冶の息子として生まれました。

棟方が自分の手で美を生まれさせたいと願うようになったのは、尋常小学校の頃からです。転んだ拍子に目の前にある沢潟の白い小さな花を見て、突然、



棟方 志功

「ハア、これが美しいというのか、こんなキレダもの、生まれさせたいナ」と思い、その瞬間に「絵を描くというふうにもならない本当のモノを、天地からいただき受けた思い」がしたといひます。

尋常小学校を卒業後、家の鍛冶屋を手伝っていました。17歳のときに青森地方裁判所の弁護士控所の給仕として働きはじめ、勤務の間をみて絵の勉強をはじめます。裁判所勤務の頃には、ゴッホに憧れを抱き、「ワ(私)だば、バン・ゴッホのようにになりたい」と言っていました。

みんなからは「シコ」はいつもゴッホ、ゴッホと言っているが風邪でもひいたかな」とからかわれたりもしたそうです。絵の仲間たちと一緒に同人展を開いたりしているうちに、東京に出て、本当の画家になりたいという気持ちで募らせ、大正13年、21歳のときに上京を果たします。靴直しの注文とりや、納豆売りなど、種々の内職を行いながら何度も帝展に出品しますが、毎年落選を繰り返します。上京のときに、父親から「帝展に入選する偉い絵描きになつてから帰って来い」と言われ、帝展に入選するまで身内が死んでも帰らないという約束をしていたので、逃げ帰ることもできませんでした。



薔薇妃の柵

上京して5年目の昭和3年、25歳のとき、青森への郷愁をふくらませていた棟方は、これで駄目なら仏様神様との誓いを破つても青森に帰る、という切ない思いをこめて油彩画「雑園」を帝展に出品します。これがようやく入選を果たし、故郷青森に凱旋しますが、父は棟方が上京した翌年に亡くなっており、墓に抱きついて泣いたそうです。

棟方が版画と出会ったのは、「雑園」が入選する少し前のことでした。油絵を描き続けているうちに、日本の油絵というものに疑問を抱きはじめるのです。

当時、日本の洋画壇には、明治以来の大家が大勢君臨していましたが、棟方が尊敬して好きなのは、梅原竜三郎、安井曾太郎

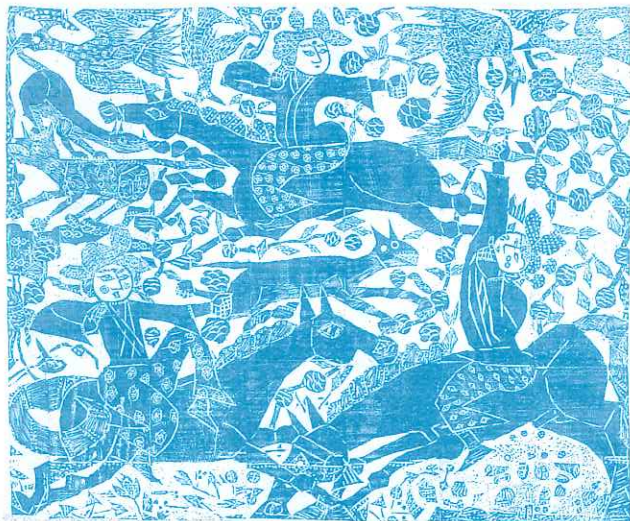
の二人だけでした。しかし、「神様のような両先生でさえ、西洋人の弟子でなかったか、日本人のわたくしは、日本から生まれ切れる仕事こそ、本当のモノだと思つたのです。そして、わたくしは、わたくしだけではじまる世界をもちたいものだ」と、生意気に考えました(『板極道』)。西洋人の真似ではなく、日本人である自分にかき生み出せない世界。それを棟方は求めました。「日本が生む絵にもっとも大切な、この国のもの、日本の魂や、執念を、命がけのものをつかまねば。そう思ったとき、棟方の前に天啓のように閃いたのが、木版画の道でした。あのゴッホさえ、高く評価して賛美を惜しまなかった木版画こそ日本のものだ」と確信した棟方は、自分の全てをそこにかけることを決意します。昭和4年、版画作品7点を春陽会に出品し、4点が入選、昭和5年の国画会にも「星座の花嫁」という一連の作品を出品し、入選します。版画の作品を出品するようになってから、落選知らずでした。棟方は版画のことを「板画」と書き、ハンガと読ませました。区別するためにイタガと言う



目鍵連の柵



須菩提の柵



はなかりしやう
華狩嶺

こともあります。棟方は自分自身の作品にはすべてこの字を使いました。版を作るのではなく、板に導かれて生まれてくるのが自分の板画だと考えたからです。棟方が大きな転機をむかえるのは、昭和11年、国画会に出品した板画作品「大和し美し」によってでした。それまで、まだ板画ということをお自分のものにしません、模索を続けていた棟方が、佐藤一英の同名の詩に出会い、「これだ！」と思つて板画にしたものです。この詩はヤマトタケルの一代記を題材にしたもので、棟方はこの作品で、板画による絵巻物をつくろうとしました。「来る日も来る日も、飯を食つたのか水を飲んだのか判らぬほど、寝食を忘れるのか寝食が無かつたのか判別せぬほど、一所懸命に彫りました」（私の履歴書）。そうして出

来上がった「大和し美し」は、棟方自身、自分の板画のはっきりとした根源をなした作品といえます。この作品をきっかけに、浜田庄司、柳宗悦や、河井寛次郎らの民芸運動のメンバーとの交流がはじまり、棟方も彼らからたいへんな大きな刺激を受けるようになります。この年が棟方の板画家としての飛躍の年となりました。

「君のものを見て居ると、人が嘗て山野を駆けまわつて居た時の荒魂が頭をもたげる。君は確かに人々の中に隠れて居る荒魂を呼び返す人だ」と柳宗悦はいいました。棟方の作品は、原始の生命力を漲らせ、縄文の神秘を持っていました。自分の力、自力で作る出すのではなく、自分以外のものの力、他力によって生まれてくる仕事こそが本物の仕事だと棟方は考えていました。視力をほとんど失つた目を見開き、板に額をつけるようにして猛スピードで板刀を動かして板を彫る。それは棟方志功という人格から抜け出し、描こうとするものと同一化しようとしていた姿でした。

棟方の作品は、国際的にも高く評価されます。昭和27年、「女人観世音板画巻」で、スイスのルガノで開かれた第2回国際版画展で優秀賞を受賞したのを皮切りに、昭和30年、ブラジル第3回サンパウロ・ビエンナーレ国際美術展にて版画部門最高賞を受賞、昭和31年、イタリア第28回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術



故知らずの柵（歌・吉村正）

展では国際版画大賞を射止めるなど、華々しく活躍しました。

さて、棟方が個展のために高知に来たのは、昭和30年7月7日です。丁度サンパウロ・ビエンナーレ版画部門最高賞の受賞の直後で、芸術家としても脂ののりきつた時期だったといえます。この時、棟方を高知に呼び、展覧会を開く中心となったのは、吉村淑甫氏（前高知県立歴史民俗資料館館長）でした。戦中・戦後、吉村氏は、日本浪漫派として知られる保田與重郎主宰の文芸同人誌「コギト」に「祖国」に参加していました。この保田與重郎を通じて、棟方との接点が生まれ、高

● 関連催し物予定 ●

☆記念講演会

□日 時／7月6日(土)
13時30分～16時

□場 所／文学館ホール

□演題・講師

☆「土佐に来た六頭身の阿修羅」
吉村 淑甫氏
(前高知県立歴史民俗資料館館長)

☆「板画家・棟方志功」
鍵岡 正謹氏
(高知県立美術館館長)

□入 場 無 料

□定 員／150名(当日先着順)

☆ビデオ上映会

「彫る・棟方志功の世界」

1975(41分)。毎日映画社。
監督／柳川 武夫 製作／草壁久四郎
ドキュメンタリー。1976年ベルリン国際映画祭記録映画部門グランプリほか芸術祭大賞、キネマ旬報ベストテン第1位など映画賞を独占した話題作。

□日 時／会期中毎日曜日
(但し8/4は除く)
午前11時～、午後2時～

□場 所／文学館ホール

□入 場 無 料

※但し入場の際に「棟方志功展」観覧券の半券をお見せください。

□定 員／50名(当日先着順)

知での個展の開催が実現したのです。高知に滞在していたのはわずか6日間でしたが、その間、棟方はあちこちを飛びまわっています。展覧会には毎日足を運ぶ一方で、大杉、桂浜、高知城をまわったり、城西中学で板画講習会をしたり、土佐風の風絵師をたずねて一緒に風絵を描いたり…。滞在していた旅館「登貴」の人々との親しい交流や、土佐の人や風景との出会いがありました。

今回の棟方志功展は、生誕100年を記念して全国で開催される展覧会です。代表作といわれる「釈迦十大弟子・二菩薩の柵」などの板画をはじめ、前後期あわせて100点余りが展示されます。吉井勇、谷崎潤一郎などの文学作品を板画に彫った作品も多く出品されます。また、高知会場では、あわせてこの土佐での棟方志功の足跡をたどるミニ企画「棟方志功と土佐」も同時開催します。

没後も、国内外で個展が開催され、大きな反響を呼んでいる棟方志功。是非多くの方にご来場いただき、棟方の魂にふれていただければと存じます。

(学芸員 野中佐知子)

高知県立文学館開館5周年記念事業

ミニ企画 「寅彦と宇吉郎の絵画展」によせて

期間 4月20日(土)~5月19日(日)

場所 文学館2階企画展示室

寺田寅彦「成増風景(A)」
大正10年10月 油彩・カンヴァス寺田 寅彦
(1878~1935)

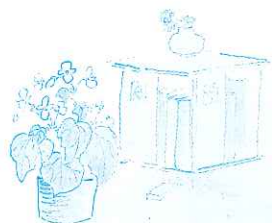
寺田寅彦は、当時を代表する物理学者であるが、その生涯は科学と藝術が渾然一体となった人格

の発露であった。

随筆を書き、楽器を演奏し、自身絵筆を取るという多芸多才の人物として知られている。身近な事象を科学の目で考察し、近代の語り部のように、科学や当時の風景や生活などを紹介。五高時代の恩師夏目漱石や田丸卓郎といった人々から強く影響を受けた。

寅彦は書画骨董を愛好した父の影響もあり絵画を趣味とし、生涯において、140点の油絵と日本画・水彩画など約300点の作品を制作している。大学に入る頃から水彩画を描き、ヨーロッパ留学以降は、セザンヌやゴッホといった後期印象派、安井曾太郎や岸田劉生らの絵画を好み、物理学の本に負けない数の画集を集めている。38歳の時に胃潰瘍で入院、この頃から、津田青楓の指導のもと水墨、淡彩画を描き始めるが、病気が一進一退の中、42歳で吐血。1カ月間入院して

寺田寅彦「花と書架」
大正8年1月 墨に淡彩・和紙・個人蔵

Taisyō 8nen 1 gusaku 5 kka.
Terada Tominiko

る。油絵の作品のほとんどは、退院後に描かれたものである。

「大宮駅構内」「日暮里風景」「成増風景」(大正10年秋)といった作品は「写生紀行」(大正11年1月、中央公論)で紹介されている。「展覧会などで本職の画家の描いた絵を見ると、美しい草木や景色や建築物が惜しげもなく材料に使われている。今の自分から見るとこれらの画家は実に羨ましい裕福な身分だと思ふ。世の中に何がぜいたくだと言つて、このようにな美しく貴重な自然を勝手自在に物が物同様に使用し、時には濫費してもいいという、これほどのぜいたくは少ないと思う。これに匹敵するぜいたくは、おそらくただ読書ぐらいのものかもしれない。そんな絵を見るたびに、きつと自分も門から外へ出てかいてみたくなるのである。(後略)」寅彦の絵画、最高潮の時期である。寅彦は東京生まれである。しかし、幼少年期を高知で過ごしており、「高知にて」「江の口川口」「種崎より桂浜」など、土佐を題材にした水彩画も多い。

「雪は天から送られた手紙である」あまりにも有名な雪水物理学者中谷宇吉郎の言葉である。

中谷宇吉郎は、石川県加賀市片山津温泉の出身。世界で初めて人工的に雪の結晶をつくることに成功した人物として知られている。東京大学在学中、寺田寅彦に師事。以来、物理学のみならず、生涯寅彦を敬愛し、幅広く影響を受けた寅彦

山脈(門弟)の一人である。

宇吉郎は、寅彦の没後、恩師に関する思い出をつづった「先生を囲む話」を発表、『冬の華』に収録。その後「寺田寅彦の追想」(昭和22年4月甲文社)として出版している。

例えば、巻頭には、寅彦との出会いから、大学時代「スパークの実験」を行うことになった経緯など「科学と文学とが融合した寅彦の全貌」が物理学者宇吉郎の言葉をもつて紹介されており、非常に興味深い。

絵画においても寅彦の影響は強く、イギリス留学の際には、寅彦の勧めで油絵の道具を持参「ロンドン・キングスカレッジ」(昭和3年6月)「巴里郊外風景」(昭和4年)など多くの作品を描いている。これらの絵は寅彦に賞賛を受けたことで、北海道大学へ赴任してからも、暇をみつけては、絵筆を取っていた。「北大植物園」(昭和5年4月)「札幌・丸山公園」(北大ボプラ並木)など、精力的に描いている。

また、「子供たち」を描いた作品も残されており、11歳で病没した、愛息子「敬宇」が1歳4カ月(昭和11年6月)のとき写生を嫌がって逃げ回る姿はなんとも愛らしく、亡くなる一年前に書かれた「写生する敬宇」と共に涙をさそう。宇吉郎は一時期、雪の研究の為、絵画からは、遠ざかるが、36歳の時、肝臓ジストマを患った際、2年間程伊東温泉で療養生活を送っており、この時に、描かれた風景や魚なども多数残されている。その後、墨絵を中心に描き始める。油



中谷宇吉郎「敬宇」

昭和11年6月 油彩・カンヴァス・個人蔵

飛雪
過水白

中谷宇吉郎「毛がに(A)」
昭和35年5月 墨・和紙・個人蔵

絵に比べ、短時間で描くことが出来ること、雪の結晶を描くのに最適であったことなどがその理由のようだが、物理学者の目で細部にいたるまで精密に描かれている。

宇吉郎は、気心の知れた友人達とよく酒を酌み交わし、墨絵を描いていたよう

で、生涯、筆を友とし、多くの作品を残した。

「寅彦と宇吉郎の藝術をひと言で表すとすれば、寅彦のそれは、大地深くから湧き出る泉、宇吉郎のそれは谷川の清流に例えたい」と前霧ヶ峰測候所長・学習院女子短期大学名誉教授の山下一郎氏はおっしゃっている。

「寅彦と宇吉郎」今回は二人の絵画50点と生原稿など全100点を展示する。この二人の物理学者の絵画をみなさんはどのようにご覧になるだろうか。

最後に、快く出品をご承諾くださった加賀市の中谷宇吉郎雪の科学館ならびに本展開催にご協力くださった皆様方に心より御礼申し上げます。

(学芸員

津田 加須子)

中谷宇吉郎
(1900~1962)

閲覧室から



『あかね空』

山本 一 著

本県出身作家で五番目に受賞した第一二六回直木賞作品。
宝暦十二(一七六二)年八月、京都から江戸深川の裏店に引越してきた豆腐職人の親子二代にわたる人情話。
主人公「永吉」は、京都南禅寺そばの平野屋に十三年奉公した豆腐職人であるが、平野屋主人の口ききで、日本橋の雑穀問屋を紹介され、豆腐屋「京や」を開業する。
固い木綿豆腐に慣れた江戸っ子には、京風の絹豆腐は口に合わず苦労するが、同業の相州屋の得意先「永代寺」に売れ残りの豆腐の喜捨をはじめ、秋には寺から大量の注文が舞いこんでくる。その後同じ長屋の桶職人の一人娘「おふみ」と結婚し、商いも軌道に乗りはじめ。
やがて「栄太郎」「悟郎」「おきみ」の二男一女が生まれるが、おふみは生まれて間もない栄太郎に火傷を負わせたことから栄太郎を溺愛し、家のなかもぎくしゃくした。
成人した栄太郎の賭場狂いから、商売敵「平田屋」からの借金で「京や」はピンチに陥るが、その結末は……。
山本周五郎、藤沢周平ともひと味違った、硬派の江戸情緒たっぷりの作品。
平成十三年十月刊・文藝春秋

「パリ憧憬」展を終えて



立春を過ぎたばかりの2月8日(金)特別展「パリ憧憬」日本人文学者のフランス体験」が高知県立文学館で開催した。今回の企画展は、これまでのものとは様相が違っていった。それは、過去における県立文学館での展示は、一人の作家の生涯を顕彰する内容のものが殆どであったが、今回初めて、作家約40名、美術・文学資料約250点という豊富な内容で「パリ」という共通のテーマをもとにビジュアル的に検証を試みたのである。

オープニング式典には、本展監修者東京大学大学院助教授・学術博士の今橋映子氏、妹の学習院大学助教授・哲学博士の今橋理子氏が来館くださり、盛大かつ厳粛に開催された。



催された。
セレモニーは、午前10時、文学館2階ロビーで文学館長の挨拶に続き、今橋映子氏からご挨拶をいただき、今橋氏、豊島知章・高知県文化環境部副部長、高橋淳一・高知県文化財団専務理事、文学館運営協議会副会長・松田光代氏、橋田恵明・高知県立文学館長の5名の皆さんによってテープカットがなされた。その後、約1時間ほど、今橋先生のギャラリートークとともに招待者の皆様は会場内をゆっくり観覧くださり、大変好評であった。
3月2日(土)午後2時からは、美術史・前京都成安造形大学学長の田邊徹氏の講演会「近代美術の先覚者 岩村透」高知・東京・パリ」が開催された。
氏は、岩村透の直弟子、田邊孝次氏のご子息。透に師事、後に東京美術学校で教鞭をとった孝次氏の語や手記を織り交ぜながら透の素顔に迫った。孝次氏の受講ノートをみると、地名、人名は全てフランス語で書かれており、各時代の特徴や文化史的背景も整然と説かれていた。痛快な講義で有名だった透であったが、「その実力はなかなかのものであった」と力説された。
また、当時の美術行政の貧弱さを説き、著作権や、学芸員の必要性についても早く唱えた透の先見性は、これからの美術界を考える上においても示唆にとんでいると締めくくられた。

「パリ憧憬」展 学芸員の(フランス)体験 記念講演会



充実した内容ながら、広報が不十分で、参加者が少なかったのは、今後の課題である。
3月17日(日)午後2時から、本展監修者今橋映子氏「日本人文学者のパリ体験」岩村透を中心に「」が開催された。①文学と美術展の試みについて②日本人にとつてのパリとは③明治期美術の仕掛け人・岩村透について④講演くださった。流暢な語り口で、特に岩村透については彼の全貌がよく理解でき、「講演をきいて、こんなに時間が短く感じられたのは初めて」と受講者の皆様にも大変好評だった。
また、文学館のあり方についても、心強いご発言をいただき、次回の企画展開催に向けて非常に励みとなった。
期間中、映画会や「文学館朗読の会」のボランティアのみならず、山本周五郎・工夫の凝らされた「朗読会」は2回開催。非常に充実した内容であった。
(津田加須子)

県内同人誌紹介

『兆』



12

一九七二年に、学芸中高等学校の職場を拠点として創刊されたミニ雑誌です。当時は、ベトナム反戦運動、全共闘運動、反公害闘争といった大きな動きが、地方都市にも及んでいました。そんな中で「兆」は、教育問題を中心に、エッセイ、評論、詩など、さまざまな表現活動を行ってきました。

世の中がいわゆる「平和」になるにつれて、運動体としての性格を薄め、詩を中心とする文芸誌として今日に至っています。同人も、高知、徳島、東京、仙台と散らばり、その作品は、椋庵文学賞、H氏賞、日本詩人クラブ賞、富田碎花賞などの成果を得ています。今年は創刊30周年ですから、すこしお祝いでもしたいと考えています。季刊。(林嗣夫)

発行所 高知市薊野二二四一三
電話 088-845-0259
発行人 代表・林 嗣夫

立仙 啓一

炎天エレジー

萱の葉はグラツク雲を刺し
ムンムン草いきれ。

けさ山羊の子が死んでいった。
足をのびしたまま。白く悲しく。

地に埋めてやったら

キリギリスたち

草原の白焰ころなの底から鳴きしきる。

ここらあたりは夜となれば

アンドロメダにいちばんちかい。

死は急がなくても

われらの星もいつか流れる。

こともなげに大空間を。



物部川土手

酒と奇行で名を馳せた立仙啓一（一九一四～一九八一・香美郡夜須町大西山生）といえはすぐに「最後の詩人」という言葉を思い浮かべる。一般から敬愛と嫌悪をないまぜにした視線を浴びつつ路地裏を八方破れでさまよう無頼派。いっさいの名利に超然。風のように、雲のように飄々と生きている人。一昔前の詩人のイメージを、最後まで運びきった詩人が、立仙だった。

春一番の吹いた三月中旬、長男洋介さん（土電ドリム社長・六三歳）と、立仙の絶唱へわが恥は物部川に流さんVの舞台、物部川を歩いた。この川は立仙が自転車もろとも転落、死の要因をつくった川でもある。物部川橋から北へ百メートル。眼下の河川敷にこきれいな公園が広がっている。中年の婦人が土筆を摘んでいた。立っていられないほど寒い風を避けて、洋介さんは、青々としたよもぎの上に腰をおろした。「オヤジはね、毎晩飲んで夜須の家まで帰った。後免駅（この駅で安芸行きに乗り換えた）で、最終電車の車掌が『あの人はまだ来んかよ』とオヤジを待ちよった。そしたら『待ちよって！待ちよって！』とオヤジがこけつまろびつ走ってくる。これが習慣やった。電車で運悪くオヤジに出くわしたこともあった。そしたら『おー！わが恩息！』ときた。恥ずかしゅうてたまらんかった。『文学』にはとんと縁のなかった洋介さん、オヤジの奇矯ぶりに随分閉口したらしい。詩人をオヤジに持つことは、つらいことだ。『けんど、酒だけは立派に受け継いだ』と大笑いする。

「ここらあたりで」と足元を指さし「五、六メートルころげ落ちた。慌てて病院へ駆けつけたらオヤジ、『ころんだ、ころんだ』と飄けて言ったんで、たいしたことないと思っただけが、翌日、帰らぬ人となった。しかしこの詩人、ただの酔っぱらい詩人ではなかった。さほど多くはない詩を仔細

に味読すれば、へべれけになりつつもたえず、宇宙（自然）と対話していたスケールの大きな詩人だったことがわかる。

掲詩は、前七連が非情ともいえる白熱の虚無が充填、後五連で一氣に闇の大空間に変貌する鮮やかな天地交感詩となっている。立仙の研ぎすまされた、原初感覚のもたらしたものだ。さらに

へそばの花V

アンドロメダの星雲は／天から脱走して谷間の村へおりていた／翡翠の風のそよぐたび／地の銀河系／蕎麦の花／シラジラ野面にゆれていた。

と、こんどは逆の天地交換（交感）の妙もみせる。立仙は宇宙の果てにふらふらと遠出するだけでなく、この地上の一隅で、ひよいと人間をやめ、自己を透かす離れ業もみせる。

へないV

（前略）青い舌を垂らしただらしない柳の蔭で／草刈鎌を私は研ぐ／茅葺の原／剣のようにひしめいている草の穂先／私は素裸で鎌のほかほかにもない／風もない。人間であつたこともない／だから、私は「死刑執行人」の烙印を押されても、草の首を切つてゆく／ザック。ザック。

晩年、口グセだったという「自然とともに朽ち果てたい」をなんとなく納得してしまふし、数々の酔狂伝説も、アンドロメダの吹きさらしの風を浴びつつのことだったと思えば、またなんとなく納得してしまう、不思議な詩人だった。

詩集に「父の墓」（一九四八年）「春愁」（一九五一年）「立仙啓一全詩集」（一九八五年・第三〇回高知県出版文化賞）。

見どころ●地引き網●月見山●吉川村桜

交 通Ⅱバス（土電・県交）安芸甲浦行き

資料受贈報告

（平成三十三年十二月～十四年二月）

敬称略

▼伊藤丘城・書美探究 伊藤丘城 現代書道研究蒼丘会 ▼佐藤泰平・「寺田寅彦の音楽・日本の古いリードオルガン」(6) 佐藤泰平編刊 ▼山川禎彦「ぼくだけのニッキ」山川禎彦 右文書院 ▼若尾慎二郎・「増補改訂版 若尾氏考 若尾慎二郎 風蘭社」▼河上迅彦「工業の詩人たち 高知工業高校文芸部編刊」他 ▼嶋岡農・「詩集」弔砲 嶋岡農 獺の会 ▼他 ▼妻島季男「四国遍路 川端龍子画・文 愛媛県立美術館」他 ▼国見純生「蜻蛉のごとく 国見純生 ながらみ書房」▼市原麟一郎・「土佐の神仏案内 市原麟一郎 リーブル出版」▼国則三雄志「路上にて 国則三雄志 土佐倶楽部社」▼高橋典子・「遺句集」帰燕 高橋恒介 土佐倶楽部社 ▼森下時男・「江戸川乱歩・横溝正史らの署名入り本を含む森下雨村旧蔵書約百五十冊」▼前田節・「油彩画」鴻ノ森遠望 楠永直枝作 他 楠永直枝（一八六〇～一九三九）は洋画家・教育者。万延元年五月八日直足、鹿の二男として長岡郡三里村（高知市）仁井田に生まれました。陶治学校に学び、のち大阪に出て啓蒙舎で漢学を学びました。明治十四（一八八二）年上京、土佐出身の画家國澤新九郎が開設した「東京画学専門学校彰技堂」で絵を学びました。十八年、文検図画科教員の免許を取得し帰高。七月高知師範学校へ赴任し、八月から高知尋常中学校（現追手前高校）に転任、大正十四（一九二五）年三

◆◆◆文学館日誌 2002年12月～2月◆◆◆

12月

◆2日 第2回紙芝居研究会。午後1時30分～午後3時まで。文学館ホール。◆8日 第4回文学カレッジ(第2回目)「『一年有半』を中心に」講師 猪野睦氏。午後1時30分～午後3時まで。文学館ホール。参加



12月8日 第4回文学カレッジ
「『一年有半』を中心に」

者約50名。桑山俊彦氏夫妻ご来館。◆9日 記念講演会 高知会館2階。午前9時30分～午後12時まで。「おあん物語とその絵巻の魅力」講師 桑山俊彦氏。「野中兼山、その誇り高き半生」講師 依光貴之氏。参加者約170名。◆14日 吉井勇館準備の方ご来館。◆15日 第21回朗読の会 第1部「別れの曲」第2部詩集より午後2時～午後4時まで。文学館ホール。参加者40名。◆19日 南国市の浜田信男氏ご来館。◆20日 土佐塾中学校187名ご来館。大野見中学校19名ご来館。◆21日 「婉という女」ビデオ上映会。午後2時～午後4時10分まで。文学館ホール参加者55名。鳴門教育大学 世羅博昭教授、沖縄国際大学 渡辺晴美教授ご来館。◆22日 「婉という女」ビデオ上映会。午後2時～午後4時10分まで。文学館ホール。参加者35名。◆23日 三水会の方3名ご来館。◆25日 燐蒸(12月30日まで)。◆26日 年末年始休館12月26日～1月1日まで。森下雨村の遺族(高橋由利、高橋桃、横谷様)ご来館。

1月
◆1日 休館日。◆2日 益田勝実氏(「おあん物語絵巻」所蔵で展示への協力者)の姫御さん一家、小澤正人氏、小澤邦子氏、小澤孝人氏ご来館。「兼山公絵伝」作者大野竜夫氏ご子息大野研一氏一家ご来館。◆



1月12日～3月31日
ミニ企画・横山青娥展



「おあん物語絵巻」の関係者
小澤氏一家を迎えて(2002.1.2)

6日 秋季企画展「おあん、婉、お馬……」土佐の近世の女性と文学」閉幕。総観覧者1,434名。ミニ企画「岡林清水展」終了。「三水会書展」岡林清水先生を偲んで」終了。第3回紙芝居研究会。◆12日 ミニ企画「横山青娥展」開催。第4回文学カレッジ(第3回目)「野中兼山とお婉」大原富枝のお婉」講師 山川禎彦氏。午後1時30分～午後3時まで。文学館ホール。参加者45名。◆16日 山本一力氏「あかね空」が第126回直木賞に決定。(日13、下期)◆19日 第22回朗読の会「南海の詩人 横山青娥」ことばを紡ぐ」午後2時～午後4時まで。文学館ホール。参加者40名。◆22日 小松夫美様ご来館。

2月



1月19日 第22回朗読の会
「南海の詩人 横山青娥—ことばを紡ぐ—」

◆3日 NHK文化センター高松一行様ご来館。29名。◆7日 今橋映子氏ご来館。◆8日 バリ憧憬日本人文学者のハフランスV体験企画展開催 オープニングセレモニー午前10時より2階でテイクカット。参加者40名。◆9日 第4回文学カレッジ(第4回目)「高知の詩人たち」講師小松弘愛氏。午後1時30分～午後3時まで。文学館ホール。参加者35名。NHK文化センター一行様30名ご来館。◆13日 弘文化省博物館監理官イザベル・バルサテ氏ご来館。防災訓練。◆16日 第23回朗読の会「シャソソ」とともに、バリ憧憬日本人の見たパリ」午後2時～午後4時まで。文学館ホール。参加者45名。◆19日 高知女子大学生20名ご来館。◆23日 「青い山脈」(1963年・日活)ビデオ上映会。午後1時30分～午後4時まで。文学館ホール。参加者30名。山本一力氏、直木賞受賞贈呈式。(於東京)

▼人事異動▲

△退職▽副館長 才津 芳久
△転入▽副館長 吉岡 貞夫
主任学芸員 川島 郁子
△転出▽主 任 嶋崎るり子



楠永直枝 鴻ノ森遠望

月まで四十年間同校の教壇に立ち、県下洋画界の先駆者として後進の指導に尽くしました。教え子には、山脇信徳、加賀野井久寿彦、中村博、若尾瀧水、田岡秋郎、島村治文、寺田寅彦などがいます。土陽美術会に所属し写実的な画風で高知市近郊、浦戸湾周辺など県内各地の風景を描いた作品が多く、坂本龍馬や板垣退助の肖像画も残っています。昭和十五(一九四〇)年五月二十九日八十歳で没。寄贈いただいた作品は寄贈者の前田節さんのお姉さんである「ちか」さんが、県立第二高女に通学のため五年間楠永家に下宿させてもらったご縁から卒業時にお祝いとして贈られたものです。この絵は昭和五十三(一九七八)年十一月の「楠永直枝とその教え子展」(会場 県立郷土文化会館)でも展示されました。このたび、寺田寅彦の師の作品ということで当館に寄贈いただいたものです。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

高知県立文学館カレンダー

2002年

4～6月

	4月—April	5月—May	6月—June
企画	県立文学館開館5周年関連事業 寅彦と宇吉郎の絵画展 ■会 期 ／平成14年4月20日(土)～5月19日(日) ■観覧料 ／一般350円(常設展入館料) 高校生以下無料 寺田寅彦と弟子の物理学者・中谷宇吉郎。二人の絵画を生原稿などとともに展示します。 関連催しもの ☆記念講演会 ☐ 日 時／4月28日(日) 午後2時～3時30分 ☐ 場 所／文学館1階ホール ☐ 入場無料 ☐ 講 師／上田 寿氏(高知大学名誉教授) ☐ 定 員／100名 ☐ 演 題／「物理学者寺田寅彦と中谷宇吉郎～絵画展によせて～」		専門講座 寺田 寅彦 5月11日(土)「地球を科学する 寺田寅彦」 6月8日(土) 講師／鈴木堯士 7月13日(土)「寺田寅彦と連句」 8月3日(土) 講師／榊原忠彦 9月7日(土)「寅彦と漱石」 10月12日(土) 講師／沢 英彦 ※いずれも13:30～15:00 ※要申し込み。詳細はお問い合わせ下さい。
	●日本文学原作の映画上映会・第1弾！● 『にごりえ』 1953年キネ旬邦画部門ベストテン第1位作品・文芸大作第7位作品 (角川文庫日本映画ベスト200) 監督／今井 正 原作／樋口一葉 出演／丹阿弥谷津子、久我美子、淡島千景ほか <日 時>2002年4月7日(日) ■11時～(第1回上映) ■13時20分～「夫・今井 正」についてのお話／今井ツヤ氏 ■14時～(第2回上映) <場 所>文学館1階ホール <参加費>500円 【主催】 小夏の映画会・高知県立文学館		
企画展示室	棟方志功展 ■会 期 ／平成14年6月28日(金)～8月4日(日)(午前9時～午後5時 入館は午後4時30分まで) 月曜日休館 ※前期：6月28日(金)～7月17日(水)、後期：7月18日(木)～8月4日(日)で主要作品以外の展示入れ替えを行います。 ■観覧料 ／一般550円(常設展含む)、高校生以下無料 ※前期展示の観覧券の半券を提示していただくと、後期展示の観覧料が2割引(440円)になります。 関連催しもの予定 ※文学館1階ホールにて ☆記念講演会 ☐ 日 時／7月6日(土) 13時30分～16時 ☐ 講 師…吉村淑甫氏(前高知県立歴史民俗資料館館長)、鍵岡正謹氏(高知県立美術館館長) ☐ 入場無料 ☐ 定 員／150名(当日先着順) ☆ビデオ上映会…「彫る・棟方志功の世界」 1975(41分)。毎日映画社。監督／柳川武夫 製作／草壁久四郎 ドキュメンタリー。1976年ベルリン国際映画祭記録映画部門グランプリほか芸術祭大賞、キネマ旬報ベストテン第1位など映画賞を独占した話題作。 ☐ 日 時／期間中毎日曜日(但し8/4は除く) 各日午前11時～、午後2時～ ☐ 入場無料 ※但し入場の際に「棟方志功展」観覧券の半券をお見せください。 ☐ 定 員／50名(当日先着順)		

【休館日】4月——1, 8, 15, 22, 30日 5月——7, 13, 20, 27日 6月——3, 10, 17, 24日

次回企画展



(1908～1982)

没後20年 田岡典夫展(仮題)

9月12日(木)～10月14日(月)

本県初の直木賞を受賞。晩年の大作『小説野中兼山』は毎日出版文化賞を受賞。シバテンを愛し、浦戸湾の風光を愛した彼の自由な精神と文学にかけた生涯をふりかえる。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)
休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
 年末年始(12月26日～1月1日)
観覧料 一般350円
 特別企画展のあるときは、料金が変わります。[一般550円]
 20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスでよりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高 知 県 立
文 学 館

高知市丸ノ内1丁目1-20
 電話 088・822・0231
 FAX 088・871・7857
 e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
 http://www2.net-kochi.jp/~kenbunka/bungaku/
 〒780-0850